

小論文

以下の【問題文】は、大阪でホームレスを支援する弁護士が自らの体験と考察を述べた文章からの抜粋である（文中の〔出題者注〕部分と下線は出題者が付加した）。これを読んで、続く【設問】に答えなさい。

【問題文】

一九九四年五月中旬の土曜日、ケンブリッジのホーリー・トリニティ教会内にあるヘンリー・マーティン・ホールで、堀之内菊三郎・多美子夫妻をはじめとするケンブリッジ日本人教会の方々が、ケンブリッジ大学神学部で宣教学を教えているジェフリー・キング氏をゲストに迎えて、留学から帰国するわたしのために、送別会をかねた集会を開いてくれました。その席に見知らぬイギリス人青年が出席していたのです。彼はただ黙って座っていました。そして、キング氏が話した後、彼は、次のような趣旨の話をしたのです。

いま話をした紳士は、顔の色つやもよく、健康そうですが、わたしは、ホームレスです。ある一つの警告をするために、イングランド中の教会を廻っています。それは、わたしたちホームレス状態にある人たちに対する教会の態度についてです。教会はわたしたちに、パンとスープを提供したり、宿泊施設を用意していますが、それは教会の一員として迎え入れるためではなく、わたしたちとの関係を切るためにやっていることではないのでしょうか。教会はこのような態度を速やかに、悔い改めるべきです。

彼は、どの教会に行ってもほとんど相手にされず、今日、ホーリー・トリニティ教会の前をたまたま通りかかったら、集会の案内があったので出席したと言っていました。

わたしは、ケンブリッジで二部屋別々の下宿を借りていました。一つはわたしの生活用であり、もう一つは裏庭に面した書斎と来客用の部屋でした。一週間後には、引き払う予定でした。来客用の部屋があるからよかったら使ってくれないかと、彼に申し出ました。彼は、それから、わたしがケンブリッジを立ち去りアイスランドに出発するまでの一週間、裏庭に面した部屋で暮らすことになったのです。

最初は乱れた生活をしていました。三日目からは自炊をはじめ、布団を干したり、洗濯物を裏庭に干したりするようになりました。暗かった顔にも生気が蘇ってきました。

わたしは、その一週間で彼からいろいろな話を聞かせてもらいました。両親の離婚後、ホームレス状態になった経緯。ロンドンの店のガラスを壊し、窃盗を働いて逮捕され、刑務所に入ったこと。刑務所で知り合った人の影響を受け、キリスト教に回心し、洗礼を受けたこと。出所後、ホームレス状態に戻ったが、どこの教会に行っても冷たくされたことなどです。

とくに彼が強調していたのは、ゲストハウスに宿泊した朝、追い出されるとき、教会の人たちのぞんざいな態度に多くの人が傷ついていることでした。そのような場所には、もう絶対に泊まりたくないと言います。

当時、わたしは文部省長期海外派遣研究員として、ケンブリッジ大学に留学するかたわら〔出題者注：筆者は弁護士になる以前は大学に所属する研究者であった〕、英国国教会のホ

ーリー・トリニティ教会の一員として、かの地にも多数生活する、ホームレス状態にある人たちとかかわるようになっていました。

ホーリー・トリニティはケンブリッジの中心部にあり、たくさんの観光客が訪れる場所ですが、ホームレス状態にある人が来ると担当の人がパン一切れと熱湯を注いだカップスープをわたすことになっていました。また、宿泊するところがない人のために、市内に数軒のゲストハウスを設置し、無料の宿泊場所も提供していました。

クリスマスやイースターのシーズンには、黄色いバケツを提げて、慈善のための献金を呼びかけ、ボランティアの教会員たちが街頭に立っていました。わたしも参加しましたが、またたく間に、たくさんのコインがバケツいっぱい集まることに驚きました。

このようなホームレス対策がおこなわれているにもかかわらず、街角には、老若男女を問わず、通行人にお金を要求するホームレスの人たちが多数いて、どうしてなのかと気になって仕方がありませんでした。知り合いになった教会員に尋ねると、「彼らはもらったお金で、酒を飲むのさ。だから絶対あげたらだめだよ」と教えてくれました。たしかに、そういうこともあったと思います。

しかし、小さな子どもを連れた女性がケム川のほとりで、夕暮れ時、あまりに必死に道行く人にお金を要求しているので、おもわず「お金を集めてどうするのか」と尋ねました。彼女はわたしの顔を覗き込んで、「ベッド&ブレクファストに泊まりたい」と怒った声で答えました。

なぜ教会のゲストハウスが嫌なのか。泊まった経験のある人にはだれでもわかりますが、「慈善」をおこない、それが「隣人愛」であるという偽善に陥っている我々には、その壁がまったく見えていなかったのです。

[中略]

アーレントは、ギリシア語のアルケインという言葉の背後に、自由であることと新しいことをはじめめる能力とが一致する経験があることを指摘し、人間が自由であるのは、人間が一つのはじまりだからであり、人間であることと自由であることはまったく同一の事柄だと主張しています。そのうえで、アーレントは、ナザレのイエスの奇蹟は、意志ではなく信仰により、超自然的な出来事ではなく、出来事の自然的な連鎖、自動的な過程をさえぎるものとして現れていることを重視すべきだと言います。

自然の過程がそうであるように、有から無へ、誕生から死に至る自動的過程はその本性からして、人間の生命を滅ぼさずにおきません。しかし、人間はこの自動的過程に服しながらも、行為によってこの過程内部でそれに抗することができるということです。そして、奇蹟を実演する人びとは、自由および行為という二つの天分を受け取っているゆえに、みずからのリアリティを樹立できる人びとであると、アーレントは結論づけます（アーレント『過去と未来の間』二二四―二三二頁）。

たしかに、ナザレのイエスが語った隣人愛の実践のたとえ話のうち、良きサマリア人のた

小論文

とえ話（新約聖書ルカ福音書一〇章二五節以下）をみてみれば、①強盗に襲われて瀕死の重傷を負っている人という歴史的具体的状況にある人間に対して、②その場に通りかかって助ける能力が十分にある人びとに応答責任が生じるが、③それらの人びとのうち、行為によって応答責任を引き受けたサマリア人だけが、関係性をもつ「隣人」となったという意味で、アーレントのいう実践をよく示しています。

しかし、ここで大事なことはケンブリッジの青年が警告したように、そのような実践・行為が、関係性の切断ではなく、継続に発展していかなければならないということです。この点で、たとえ話のなかでサマリア人が、お金を渡した宿屋の主人に「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います」と言っている姿が、ホームレス状態にある人たちとの実践的にかかわり方を象徴しているのではないのでしょうか。

（出典：遠藤比呂通『国家とは何か、或いは人間について一怒りと記憶の憲法学』（勁草書房、2021年））

【設問】

問1 下線部に関する（1）と（2）の問いに答えなさい。

- （1）著者が下線部で表現するところは、誰と誰との間の、何に関する、どのような認識の隔たりを意味するか。解答用紙の所定欄に収まる文章で端的に説明しなさい。
- （2）（1）で説明した認識の隔たりを、著者はどのように評価しているか。【問題文】を適宜要約しながら、文章で説明しなさい。

問2 現在の日本において社会的支援を必要としている人びとに関する（1）と（2）の問いに答えなさい。

- （1）ホームレス以外の具体例を一つ挙げ、社会的支援が必要とされる実情を、解答用紙の所定欄に収まる文章で端的に説明しなさい。
- （2）（1）に挙げた人びとが人間としての自由を回復するための実践的支援はどうあるべきか、【問題文】における著者の主張に触れながら、あなたの考えを述べなさい。なお、関連する法制度に言及する必要はない。

（100点）